

周辺からの記憶 52

2024 年度 東日本・家族応援プロジェクト＋ 福島県沿岸部

村本邦子（立命館大学）

今年は定年退職の年なので、このプロジェクトでも、毎年開催しているシンポジウムで、この15年半の振り返りをすることにした。それで、8月末から9月にかけて、青森県むつ市、岩手県宮古市、宮城県多賀城市、福島県福島市・白河市と南下しながら、プロジェクトを協働してきた機関や人々を訪ね、座談会やインタビューを行っている。

どこを訪ねても、みなさん暖かく迎え入れて下さり、貴重なお話が聞ける。このような場を開くことができたことで生まれてくるたくさんの物語がある。まだまだ聴かなければならない物語がたくさん埋もれていて、時間と共にあらたに生み出されてもいるのだ。このような関係を続けて来られたことは私の人生にとって本当に大きなことだったなあとしみじみ思う。これからも細く長く関係を続けて行けたらと願う。



9月1日(日)民話の会との交流会

塩竈から常磐線で新地町まで移動し、小川観海堂にて、みやぎ民話の会、新地語ってみっ会、川島秀一先生との交流会を持った。

新地語ってみっ会の小野トメヨさんは、ちょうど百歳を迎えたという。トメヨさんは、70歳ぐらいから始めて、昔話を語っていたが、東日本大震災の時には、家も何もかもなくされ、東京の息子さんのところに避難していた。小野和子さんからの手紙に、「すべてされたけども、私には民話が残っています」と返事をされ、その言葉に皆が励まされたのだという。トメヨさんは、新地町の昔話を聞かせてくださった。

鹿狼山の手長明神

ここからだってね、あのすぐこう見るとね、こんな山があるの。これね、鹿狼山って言ってんだけどね、このお話ね、昔々の大昔。名前も何にもついてないただの山。その頃は土の塊の山だったかどうかもわからない。大昔のことだから。その頃ね、この山のとっぺんにね、手の長いね、老人が住んでおったんだと。白髪のおじいさんが。そしてね、そのおじいさんはね、鹿、白い鹿とオオカミ。そんなのをね、オオカミと鹿をね、いつも可愛がって手元に置いてね、その辺を、山を行ったり来たりね、いつでもその鹿とオオカミを連れて山で暮らしとったと。この山で。

そしたらね、ある時ね、おじいさんもね、あー、腹が減ったな、何か食うものがないかな、なんてね、この山に跨って四方をずっと眺めてた。そしたら、あっちの方にね、あー、蛤が見えた。ずーっと波たってね、蛤がずー

っとつられて。そこへね、山のとっぺんから手を伸ばしてね、そうしてね、こう探ってガーツとしてみたらね、貝がいっぱいあったんだと。それで、おお、なんだこれ、貝。で、取って食べてみっかな、なんて食べたら、あ、これは美味しい、になってね。それで殻、外は殻硬いから、中だけ、あー、美味しい、なつてれば、殻はあーこの山のとっぺんからポーンなんてしてね、またまたもっと取って、あ、この貝も美味しいね。またポーンとな。もうどの貝とってもね、あ、ハマグリ、アサリ、あー、こっちがいいなんていっぱいね。取っては食べて、ポーンと殻投げて、長い年月ね、育てて暮らしてたらね。

そのね、貝殻。山と海とのね。えー、ちょうど真ん中頃にね、その貝殻いっぱい詰まってるね、それ今に残っているね、あの小川の貝塚と言って、すぐその辺にね、もう二百メートルぐらい行ったところにね、山となったね、その跡が今に残っている。新地町のね、えー、貝塚、小川の貝塚といってね、国の史跡文化財として保護されて残っています。そしてね、この山はね、鹿とオオカミのね、連れ合って歩いてた山だからね、鹿と狼の山、ほら、鹿狼山という名前になってるの。そして、今はこれはね、福島県の緑の百景に選ばれてね、方々からね、あの登山に来る人がいっぱいおります。そんな山になってます。





早川の長者さん

でね、この山麓にね、早川の長者さんという人が住んでおったと、これ長者様つうんだからこれ。ええ、それはそれはね。蔵が三つもあって、ああ、ギナン(下男)、ギジョ(下女)をいっぱい使ってね、裕福な暮らししてるのよ。で、そこにね、一人息子があってね、年頃になったもんだからね、みんな世話をしてね、綺麗な嫁さんもらったんだ。で、みんなね、この息子も家族もね、ああ、よかったいい嫁もらってになってね、みんな喜んでたのね。

そしたらね、どうしたことかね、その嫁様ね、あの三年経っても五年経ってもね、子宝に恵まれねえんだと。ほんだからね、ああ、これ長者様、なんとか早くうちに孫が生まれればいいのにと考えたって、いつまでたっても生まれないから、もうね、世間の人たちね、あれ、長者様いうんでは四つに頑張れねえんではもうこんだけの字でおしめえどあるってね、噂が立ってしまった。いやー、長者様、そんなこんだい限りで終わりにしたくない。

ほんでね、この山の神様にね、鹿狼の山の神様にね、願をかけたんだと長者様。あー、そしてね、うちの嫁に言う、お宝が刺さるようにってね、願をかけた。そしたらね、

満願の日にね、長者様の夢枕にね、えーそんだらね、この鹿狼山の中に入っているとろろ芋を掘ってかけてみろなんていうお告げだったと。それで早速、ギナンに命じてね、山いっぺん巡らしてね、とろろ芋を掘らせた。ところがこれ、山にはえているとろろ芋っていうのは自然薯と呼ばれてあれ、山に一人ではえているんだから、掘るたってこれ木の根っこが邪魔になってね、それにも容易でなかったと。それでもこれね、何本か掘ってね、すりおろしてね、あの、すりおろしたって、これ畑で作っているとろろ芋と全然違うんだから、団子みたいになるのよ。すりおろしたら、それをよくすり鉢でね、すりこじ棒でよくゴロゴロゴロゴロ、それに味噌汁を少しずつ混ぜて、ゴロゴロゴロゴロ、一度に混ぜたら飲めないから、もうゆっくり時間をかけてね、伸ばして、いいあんばいに伸ばしてね、そうしてね、あーこれ、とろろ飯にしてかけてみたんだと、嫁さん。

そして浜、そこのすぐそこの浜にカレイなんていう魚もあるから、そんなのもかけてみたらね。なんせ体が丈夫になったんだね、精がついてね、次の年、早速子供が生まれた。また次の年も生まれた。また次の年もなってるね。まずね、十年のうちにね、いやいやいやいや、途中で二つ子なども生まれてね。十年のうちに十一人の子宝に恵まれ、いやあ、長者様のお喜び。それはそれはお喜びね。それからついこの間ね、その山麓にね、一軒の民宿屋ができてね、とろろ飯が有名になって、もうみんなね、山に遊びに来る人たち、その精がつくのにあやかりたくてね、もうとろろ飯みんな食べていた。昭和の時代まで大繁盛でした。その後において、今はね、時代が変わってその民宿もなくなりましたけれども

ね。はい、あれは今度レストランになって名前になったけどね。でもとろろ飯は昔はね、みんな大喜び。どこの家でもね、食べてましたよ。え、そんな話ね。そしてね、その周辺一体ね、早川の姓のついた名前がね、あそこの早川さん、あれ、あそこもあの曲がり角も早川さんなんてね、早川の姓のついた家がいっぱいあるのだから、その長者さんは今に栄えているんだね。おしまい。はい、失礼しました。

津波の話

あの3月11日ね。いや一驚きましたよ。突然の大地震だもの。その地震ね、今だからってね一経験しないね。昔の家っていうのはね、みんな、この家も昔の家だからね。これ柱っていうのがね、ここもちょっと、昔はね、家ごとにこう柱建ってたのよ。そう。その柱がね、もうね、こういう風にね、こう、ほら、90度の真ん中、45度、この辺までね、こう揺れるんですよ。今度はこっち、南と北に揺れたの。ほんで私がこう見てたんだけど、この揺れがこうなって、またこうなってね、この揺れのおっかなくてね、もう頭がもう麻痺してしまったんだね。今にも潰れそうだから。

もうそしてね、襖なんてあるでしょ、これ。こうするとね、こう揺れた時ね、バーンとね、すごい音たててね、一気にこのね、この角から角までこういう斜めに破けるんですよ。これ、ね、それがものすごい音なる。この昔のね、襖っていうのは糸が入ってるのよ。横に縦に。そして中まで紙だから、丈夫な紙で貼ってあるの。それがね、斜めにバーンとね、家でね、その音が何の音かわからないのよ。こんな揺れてるから気が動転してる。そうす

るとバーン、バーンって。こうしたら、こう見たらこんな斜めに。いやね、あの地震のすごいのにね。もう頭がね、麻痺して。

その後にはら、放送が、町でだって驚いたから、ああ津波が来る情報が入ったね。情報が入ったから、みんなね、いやあ、あんで津波がほら、その前からね、度々ほら、あの仙台大きい地震っていう大きい地震が近々来るらしいという、ほら、情報があったから、みんなね、そのつもりではいたんだけどもね。その時は、こういう風に避難する、こういう風にして指導されていたんだけどね。その揺れでね、もう頭が麻痺してしまうんだね。そしてね、避難する時にはね、えー救急袋って当座の食料品を詰めてたりね、そういうみんな町で用意してくれてたからね、そういうの裏にかけておくんですよ。ところがもうね、それを用意してたの。ところがね、そこにかけてあるのだっちゃ、もう気がつかない、頭が麻痺しちゃう、その揺れで。すごい揺れでした。

そしてね、もう何も持たず、避難する。今から大津波が来ますっていう放送があるのよ。その放送が聞こえた家と聞こえない家とあったの。ほら、今日の機械が故障したか何かでね、家には聞こえなかったからね。もうそれで早く大津波が来るから避難してください、こう言ってるからね。もう大急ぎでみんな避難したわけですよ。

だけどね、あー案外ね、おれ今まで大津波なんか来たことないからね、あー津波なんか、こんなこと、どんな津波だからってわざわざ逃げるつもりあるんだと。どんな津波だから、そんなこんなことしてられない。私らはさっさと避難したからね。うーん、でね、何にもね、ほら、放送する人でも大津波が来るっ

ていうことは興奮しているからね。大声でしょ、そういうのね、もう、もうちょっと何かね、皆さん冷静になって落ち着いてこういう風に避難してくださいとか言われればいいのに、ほら、放送する人だって興奮してるから、もう早く逃げないとダメなのかななんて思ってね。もうみんな何にも持たないでね、避難したんですよ。

いやー、ねー、本当にね、ああいう時はよく落ち着いてね。この前にはね、私もね、いざ避難する時には、ここのこれ、引き出しにいっぱい何か色々入って、この引き出し 1 本だけこう取れば大丈夫なんてね、それを持って逃げようなんて思ってたんだけどな。その場になったらね。それも思い出せねえんだよ。頭が麻痺してね。本当にね。あれはもっともっと強く強くあの、教育しておかなきゃダメだったなと思ってますね。

そんなわけでね、私はみんなはやばやと避難したからね。おかげで家族もみんなもね、あの、無事でしたけれどもね、ものは一切もう流れてね。あの二階なんかやっぱり、二階、今の作りで二階と下と分離するのね。表に、あの波でドーンとしたら、二階と下と分離して、二階だけプンプンと流れていったね。ずっと 200 メートルも、ずっとこの田んぼの中に二階がありましたよ、うちでね。

そしてその時ね、うちの娘のところの姑、おばあさんがね、90 歳の人が、95 歳ぐらいになったおばあさんいたの。そしたらそのおばあさんの家ではね、あー、情報が入ってなかったんだと。情報。なんかね、機械があるんだけどね、放送がわかんなかったんだ。そしてその時ね、あの若い夫婦はね、どっか用足しに出かけてね、おばあさん 1 人留守

番した。そしたらね、のんびりして、ほら地震になったから、あ、これではもうこんな時にはね、あーどこかに逃げていこうってね、あー、こういう時は水が必要だって、ボトルの 2 本ね、水をね、リュックに入れて背負ってね、表も逃げていこうと思ったらね、誰かね、そっち東の方でキャーッと騒ぐ大声した人があったんで、ひょっとこを見たらね 東から津波がそこに来たんだ。当然おばあさん急いでね、こっちの方にね、二階に上がろうかと思ったって。来てやっここに津波が来て、大急ぎでこの小さい部屋にね、入り込んで、押し入れの小さいところに、タンスなんか入っていた小っちゃい部屋、そこを開けてそこに入って、戸をパチンと閉めた途端ね、その戸にドーンと津波が入って、ぶつかってね、戸がこんな斜めになったけどね、隙間からだんだんだんだんで津波が入ってきた。そのおばあさんね、そしたらね、自分がタンスに、とつつかむ、あの引き出しのこうつかまってね、そしたらだんだんだんだんこう上がってきてね、その津波がここまで来たの、こーしてね。あら、そういうふうにそのおばあさん言ったからね、私にすっかり語って聞かせたの。そしたらね、ここまで来たけど、津波だったらね、いつ引くだろうと、こう思ったって。そしてようやく、こう何か足でね、上がるものでもないかと思って足で探ったりしてね。ぐーっと来てたら、ここまで来た時にね、水が少しここまで来たり、しょっぱい水が。あ、やはり津波だと思ってね。ここまで来た時、今度だんだんと水がね、下がってきてね。そしてそのおばあさんも助かったってね。

私によく聞かせてくれました、ほんと。そんな話がありましたね。で、いろいろね、避

難の状態とか何かはね、それぞれ違うんですよ。うん。早くさっさと逃げた人から、あーこんな、あー、あの津波なんかここまで来ねえだろうなんて言う人だの、まちまちでしたけどもね。やはり大きな地震だったらね、やはり大津波が来るということは、これはよくね、心構えしとかなければならないということね。これつくづく私もね、反省しています。ね、本当に。

本当にそのおばあさんはしっかり者だったね。うーん、でね、そういう時は気持ちかね、もう狂いそうだったでしょうねって、私たちが。いやいやね、そういう時は案外落ち着いてるもんですって。冷静でね、いつかは津波は来くだろうって思ってね、我慢して辛抱していたっていうんだね。やっぱり自然と来て、ほら、ね、こうやって。そしたらガラガラになってね、外に出たら誰もいないね、もう死んだ気持ちになってね。その日いっぱいね、あー、自動車だ、ゴミだ、物だって、いっぱい瓦礫が流れてね。自分の家の屋上だって、あ、ベッドはこっちの方に行ったりね、ガラスは倒れたりね、大変なんね、うちで、その家ももうね、使えなくなったの、下のね、2階の方は残ったけど、下はダメだからね。そんな人が、そのおばあさん助かったお話を



ね。

トメヨさんのこと(島津さんより)

トメヨさんはご自分のことをおっしゃらなかったんですけども、前に聞いたお話では、小さなバググ一つ持って、それこそ用意してた救急箱とか、いろんなものを全部置いて、小さなバググひとつ、3つほど手提げ袋を持って近くにある三階建ての役場にみんなで逃げたそうです。少し奥まってるし、まさかそこまで水も来ないだろうなんて思ったのに、案外一階がダメになり、役場の三階に逃げろってことになったそうです。トメヨさんは三階にいたので、直接様子は見てないんだよっておっしゃってました。そこでしばらく三階にいて、東京から迎えに来てくれた息子さんのところに連れて行かれて、しばらく向こうで過ごされたんですけども、やっぱり元は全然知った人もいない、こちらの様子もわからない。電話をかけようとして、あの家はどうなった？ それから庭にあった柿の木はどうなった？ って聞くと、全部ありませんって言われる。何にもありませんって言われるってということで、本当にその様子はトメヨさんですらご想像できないような状態だったんだと思います。

トメヨさんはその後、戻らないで、仮設住宅にしばらく住んでらして、今はそのすぐ近くの高台に調整した土地に建てたおうちに住んでいらっしゃる。そして語りをやっていらっしゃる。今聞いていただいてわかると思うんですけど、語りの力がありますよね。普段は少し元気ないなと思ってても、明日語りしなくてはいけないなとか、今日は例えば学生さん来るんだなっていうと、しゅっとなるんだよってという話で、もうそろそろやめましようかって言うんだけど、でもあのお話

あったよねとか言って、やり始めるとまたこう背筋がピンと伸びてくるような、そんな感じのお方です。本当に見習いたいような大先輩なんですね。

トメヨさんのことで私、覚えています。本当に何もかも流されちゃいましたよね。したら、片付けをしないと神様が言って、持って行かれたと話されたんです。その中に込められた思いは色々あると思うんですけども、そんな言い方をされて気のしっかりされた方だなあと思いました。

なんで語り始めるようになったかっていうと、2001年、福島県で福島みらい博っていう展覧会をやったんです。その中に民話の部屋がカフェになって、福島県内の語り手をいろいろ募集したんだそうです。その時に民話には興味はあったけれども、あんまり語ってはいなかったんだけどやってみようかなと思って、70歳で手を挙げられて、それから本当に勉強されて、そこでいろんな資料を読み込まれたり、人に聞いたり、そうやって今、トメヨさんがいらっしゃる。

そこにいらっしゃる村上さんもとても大変な思いをくぐり抜けてこられて、そのお話もちょっと聞いていただければと思います。



朝日館女将の7DAYS(村上さん)

今日は紙芝居を読みたいなあと思います。なんで私がしゃしゃり出てきたかっていうと、そういうおせっかいな性格っていうのもあるかもしれないし、一番心臓が強いっていうのも一つあります。もう一つは、メンバーの中で被災しているのは私一人なんです。他のメンバーは本当に幸いなことに被災しませんで、今回被災のお話をというお話だったので、紙芝居を読みながらいろんなお話をさせていただこうかなというふうに思います。

この紙芝居には、ここに広島、福島とあり、これは広島市民の方が、福島県も被災したところに作って送ってくださった紙芝居で、最初は、かつて放射能に苦しんだ経験を持つ広島市民として、今、放射能に苦しめられている福島の人たちに何か元気が出るものを贈りたい、何がいいだろう、自分の住んでいる街に住めなくて、よそに行かれている方も大勢いるって聞いたから、自分が住んでいた街の民話を住んでいたところの方言で紙芝居にしたなら、それを読んだら喜ばれるんじゃないかと、最初は民話の紙芝居が届きました。

今、トメヨさんが話してくれましたけど、一番先に届いたのはこの鹿狼山というお話で、トメヨさんのところに一番先に届いています。トメヨさんが、「私、高齢だからこれをもって利用のしようがないから、語ってみっ会はどうですか？」って言って、私たちの会のところに届いたんです。

最初のうちは民話が届き、もっと作るから民話を教えてくださいって広島から手紙来たんですよ。私、民話じゃなくて、今回の被災

体験をぜひ紙芝居にしてやりたい、なぜかっていうと、人間はすぐ忘れちゃうから。新地町の民話をいろいろ調べてみると、今から何百年前ですね、3月1日に1年に1回、大津波は800年、そのぐらいですよ。今回と同じぐらいの規模の津波が来てるんです。それは地質学の先生が調べても、地層の中で繋がって、ここまで津波が来たんだっていうのが昔話が残ってるんです。例えば船場沢っていう地名のところがあって、そこは津波の時にちっちゃい船が流されてそこでクルクルクルこう輪を描いていたので、船場沢って名前がついた。山の方には小鯨っていう地名もあるんです。そこはちっちゃいクジラが流されて、で、小鯨って名前がついた。さっきトメヨさんが言った鹿狼山のその向こう側に地藏守っていう山もある。そこは道端にお地藏さんが立っていたんだけど、津波が来て、地藏さんが流されそう。慌てて船にお地藏様を乗せた。船頭さんはいない。その船がずんずんずんずん川上に進んでって、山の中腹で止まる。で、その山の名を地藏守っていうふうに津波伝説に残ってるんです。

でも、私たち、それを本当のことだと思って今に語っていくべきときに、ずっと嘘話っていうか、昔話っていうか、聞いた話として語ってきて、だから新地にそんな風に昔も津波が来たっていうふうには語ってなかったんです。でも、今回の津波で、実際にその地名のところまで津波が来てる。だから実証されたんですよ。なんで私たちは、ここまで津波来たっていう昔話残ってるのに、そんなふうに語らなかったのか、津波って言ったら、ここより遠く逃げなくちゃいけないんだよって言わなかったのが、私は自分ですご

く申し訳なくて、その思いがずっとあったので、紙芝居を残したいと。私たち語ってみっ会のメンバーがいなくなったらね、あと、多分20年かすればもう誰もいなくなると思う。そしたら語る人がいなくなっちゃう。だけど、紙芝居にして残しておけば、誰にでも伝わると思う。今、小学生はもうすでに震災後生まれた子ばかりになってきたけど、新地にもまた津波来るからねって教えておけば、それが一番の防災になると思う。伝承が一番の防災になると思うので、震災のことを書いてくださいと。

その後、震災の紙芝居が100本に近いほどできたと思います。これは東北町物語、紙芝居化100本プロジェクトっていう名前の団体なんですよ。すでに100を超えるところに紙芝居が届けられている。さらに、その中から現在10本ぐらいをアニメとしても残してる。絵を描いて、声の出演は、その市町村の方たちが行って、漁師さんの役は漁師さんみたいな感じで、皆さんが自分の役をアフレコしたアニメがある。川島先生も出演をされています。

これは「朝日館女将の7days」という紙芝居です。朝日館女将っていうのは私です。私は山辺のところで明治の初めくらいから100年近く続いた小さな宿屋の女将をしています。あの時のことを紙芝居にしました。

意外と最初の1週間の記録がなかったんです。1週間過ぎると映像とか、体験談とかいっぱい残ってるんですよ。多分その時は私もそうですけど、最初の頃はあまりにも毎日自分たちが生きていくのに必死で記録が残ってないんですよ。本当に必死に生きていた、生活してたという感じで記憶が飛んでる。いろんな人の7daysがある。これは私

が文を書いて、この時はまだ広島市の職員だった福元さんが描かれた。これを私が読みたいと思いますので聞いてください。

（と紙芝居が披露された）

あまりに必死だったので、あちこちの記憶は飛んでいて、今こうして思い返しても現実なのか夢なのかと思える。まるで幻のようさえ思える。それまでは明日が来ることを信じてた。明日が来るとは限らない。今日しか今しか生きることができない。

震災の年の9月にお友達が東北遍路というのを立ち上げて、それを手伝っています。青森県から福島県まで21ヶ所の巡礼ポイントが選ばれました。それぞれにストーリーがある場所です。被災地4県手をつないで復興していこうっていうのは私たちだけじゃないかな。私はいつもすごく自慢に思っています。自分の今の体験を紙芝居だけじゃなく本にしようと思って、去年出しました。そして、福島民報新聞社民放出版文化賞っていうのをこの間、頂きました。



川嶋先生のお話

最初の小野トメヨさんの話、やはり100歳とは思えない声の張りと記憶力と話の展開の仕方っていうのは非常に驚きました。近所のばあさんから聞いた話もトメヨさんの中に入ると、あのくらいの迫力をもって伝えていく力を持ってるんだなということですね。だから、体験談だけでなく、体験した人から聞いて自分のものにしていくっていう力を持っている人だなということを感じました。

村上さんの紙芝居も、これは実は私初めて見せていただいたんですが、見事というほかなかったですね。やはり語り部の仕事をしていたから、そういう活動をしていたからこそ紙芝居も生きてくるんだってつくづく思いました。テーマが小さいセブンデイズ、実はこれは確かに大事なことだと思って聞きながら、私も七日間のことをうろ覚えに思い出していたんですが、覚えているのはだいたい地震直後のこと。それから津波が、私も津波自身は体験してないんですけど、津波が来た気仙沼の状態ですね。それから家がなくなっていたっていう、それも1週間の翌日から、それがわかった時、あとは携帯が繋がったっていうのが6日目でした。ドコモなんですが、私が持ってたのが、ちょうどある噂話で、あそこが通じるっていうから行ってみたんですね。そうしたら皆からメールがいっぱい入っていた。それからそこに私は毎晩行くようになって、職場に避難してたんですが、行くときはちょっとドコモマシン行ってくるからと、通知したものでした。そのいっぱいいたまっていた電話の中でやっぱり多かったのは各地の漁師さんですね。私は、それ

まで全国の漁業の話を聞いて歩いていて、例えば高知県の漁師さんなんかはもう十何回も入れていました。もう一人の方は、鹿児島県の沖永良部の漁師さんでしたが、一人一人ずつ返していったんですね。電話で。6日目でしたら、この返した時にその沖縄沖永良部の漁師さんたちは電話の向こうで泣いてしまってるんですね。で、私はそれまで涙を流すことが一つもなかったんです。家がなくなった時も、母親がもういないっていうことも知った時も涙は出なかったんですが、向こうの漁師さんが泣いてて、こちらがもらい泣きして、その時ちょっと何かが崩れたようになって泣いた覚えが、一緒になって泣いた覚えがあります。それが6日目だったと思うんですね。

その後も色々です。自分が何が立ち上がりそうと思った時とは、それは1週間過ぎてもう1ヶ月くらいだと思いますね、まあ母親のDNA鑑定するからって言って電話を頂いたときとか、関連したいろいろな思い出がありますが、やはり語り部をやっている人、文学をやってきた人、すでにそういうときにどうしたらいいかっていうことをやっぱり蓄えている気がするんですね。小説とか文学とか、それから語り物、噂話でもそうです。それは何よりも強さの元になるんじゃないかと私は今でもやはり、あの文化系の研究をやってきてよかったと思うのは、そういう部分ですね。

皆様、これからいろんな体験をすると思うんですが、同時にね。音楽の世界とか、そういうのをどんどん読んでですね、要するに人間を研究してほしい。つたない話ですが、私からのコメントという形でお話ししました。どうもありがとうございます。ありがとうございます。

ざいました。



鵜野先生コメント

トミヨさんの話もとっても心に染みまし、それからあの朝日館の女将さんですか、村上さんの紙芝居も、とっても心に染みまし。今、川島先生がおっしゃられた、あのドコモ橋の話を初めて伺ったので、ああ、そういうこともあったんだなって知りまして、本当にいい話を聞かせていただけたなというふうに思っております。

島津さんを始め、スタッフの皆様というか、今日の間を設けてくださって、そしてzoomの力というか、ありがたいことだと思って、えーそれも含めてあの皆様に感謝したいと思います。どうもありがとうございました。



参加者からのコメント

・民話っていうものを初めて聞いてみて、やっぱりいろんなメッセージが込められているんだっていうのがわかりました。私は滋賀県出身なんですけど、自分自身の県の民話とか一切知らないんで、この機会にちょっと知ってみようかなと思いました。ありがとうございました。

・すごく臨場感のあるお話で面白かったです。ひとつ質問したいことがあるんですけど、本とか漫画とかいろいろ伝える媒体がある中で、なぜ紙芝居を選ばれたのか。肉声で届けたっていうのが、やっぱりちょっと違うような気がする。

⇒新地の紙芝居は、頼まれて日本全国紙芝居を担いで歩いて、400回以上、500回近く読んでるんですね。やっぱり肉声で届けるっていうのは、本を読むとは違う。50歳になってから医学界に入って研究してらっしゃる友人がいるんですけど、やはり肉声が一番いいと。なるべく紙芝居とか昔話、録音や録画じゃなくて、頑張って日本全国歩いて話してって言われたので、この紙芝居で声が届くようにしてきました。

・私たちみやぎ民話の会は、伝承の語り継ぎ、伝えられてきた語りを聞いてもらおうと民話の学校を開いていたんですよ。それがあの2011年に大きな大震災になって、その時に、あの3月に起こった地震のことを、8月に被災エリアど真ん中に南三陸町志津川で開きましよう、ととても早かったんです。そんなことできるのかと最初は思いました。でも、小野和子さん、去年のお話を聞かれた方もいらっしまったかと思いますが、や

りましようということで、6人の方に体験を直接聞いてもらった。

全国から集まっても仙台から交通手段がなくて、バスをチャーターして行ってみたら、水がまだ出ないかもしれないと、そんな状態のところだったんです。なんとかギリギリ水は間に合って、200人、100人くらいの方が聞いたんです。川島先生にも関わって頂きました。死ぬ側でやるんだったら引き受けますっておっしゃってくださって、やっぱり直接見る、聞くこと、トメヨさんにしても、アイさんにしても、本当に今でもドキドキするような体験なのに、それをまたこう、皆を笑わせながら話してくださるんですよ。みんな涙流しながら笑ってるんですよ。そういう経験って本当に貴重なものだったなと思ひまして、参加して下さった方々に私たちは何もできないけれど、聞くことができますって言うて下さったのが心に残っています。そういうことで、本当に今は直接その話をする、語るっていうことが大事なんだなって思ひました。



・私は岩手県の岩出町と竜泉洞っていうところを転々と歩いたんですけど、中学校時代をそこで過ごしたんですね。岩出小学校っていうのは20キロも離れた内陸にある学校だったにも関わらず、遠足だとか海浜学習

だとかに行くとね、どこどこに女の人が裸で絡まって死んでたとか、お寺さんの階段ここまで逃げた人は助かったとか、こっから下はみんな死んだよ、中にはおばあさんを送った嫁さんも踏んじゃって、ここにも届かない、早く早くって言っていて、流されて行ったんだとか、そういう話を子どもの時に聞いていて、もう夜怖くて眠れないぐらい。そういう風に津波の話を聞いて育った。一方、主人は、新地は津波が来ないいい町だと、逃げようって言っても、いやあ、津波来ないんだからいいんだ、新地に津波来たことないんだと逃げなかったのを、ギリギリ逃げた。やっぱり避難するっていうことを子どもの時からちゃんと教えておかなきゃダメだなと。たとえ空振りになったとしても、避難しないといけない。私は学校を中心にずーっと回って、自分の命を守るのは自分しかないんだからねって話をしていたんです。災害の時にみんなが自分の命を守ったら死ぬ人いないわよって。

・東日本大震災、30年のうちに必ず地震が来るっていうのは知っていて、私は今日から30年後だと思ってました。30年後は今日かもしれない、その感覚は私にはなかった。この頃、線状降水帯っていうのが最近毎日のように聞きますよね、台風19号でね、本当に今どこで何が起きてるかわからない。私は山の向こうの丸森っていうところに生まれたんですが、丸森には津波は来ないとみんなもそう言ってたんです。ところがその線状降水帯で、700ミリとか700ミリとかっていうものすごい雨が降って、山から崩れてくる山砂で一つの集落はまるっきりなくなっ

たし、命を落とした人も何人もいます。本

だとかで何が起こるかわからない。自分ごととして捉えるっていうことができるかが重要だと思っています。

・トメヨさんが話し始められたらすごいパワーを感じて、すごい面白くて笑っちゃう、なんか本当に包まれるパワーみたいなものを感じたりとか。村上さんの紙芝居も途中からすごく引き込まれて、時間を忘れる感覚がありました。本を先に読ませていただいてたんですけど、実際に語っていただくとなんかやっぱり質感が違うというか、さっきも肉声であることが大事というお話だったと思うんですけど、実際に目を合わせたり直接感じるなかで自分ごととして捉えられていくんだと思いました。

・ズームで参加させていただきまして、今日はありがとうございました。トメヨさんの話を聞いて、民話で土地の名前にゆかりのある話を聞くのは、とても興味深いと思いました。あと、紙芝居ですね、本当に切実な1日1日だったんだなと思って聞かせていただきました。どうもありがとうございました。

・同じくズームで聞かせていただきました。昨年は現地で参加させていただいて、話を聞きながら去年何の話を聞いたかなと思いはせていたら、すごく鮮明に覚えている。1年間慌ただしく過ごした中でも、こんなに民話って覚えてる、語り手の生き生きとした口調と合わせて覚えているものなんだなと改めて感謝をいたしました。

トメヨさんのお話もとても勉強になりました。川島先生もおっしゃっていたように、娘さんの嫁ぎ先のおばあさんのお話ですか

ね、避難するまでのお話が刻々とドラマを見ているような語り口調だったこともとても印象的でした。紙芝居も含めて勉強させていただいてありがとうございました。

・福島県に在学してて、僕は岩手県大船渡市に住んでいます。ドラマの力っていうか、お話を聞かせていただくことも、ものすごい力になると感じました。最初のお話もそうですし、映像で浮かぶかのような感覚を得ましたし、皆さんの考えも聞きたくて、本当に身につまされる内容でした。実際に生のお話を聞くことが、多分一番どうやって備えるか、どうやって自分の身に起きたら再現するのかを考える、非常にいい機会なんじゃないかなということを感じました。あと、面白いなと心に残ったのは、私たちは何かに守られてるんだなと。そういう感覚を非常に感じるころがあって。ありがとうございました。

・発災直後の 7 日間の物語を語っていただいたので、私にも 7 日間はどうかだったかなっていうこと、繰り返し頭の中で思い出すことができました。今日は本当に貴重なお時間をありがとうございます。

・このプロジェクト 2011 年に始まる時に、原発事故にしっかり見てこなかった自分への罪悪感もあって、中央と周辺の関係を見直したいと、支援とかではなくて証人になることを目標として掲げて活動をしてきたんですが、当初思った以上にたくさんのことを学ばせていただいています。とくに民話の会の皆さんとは、大学時代の同級生である鶴野先生を介してご縁があり、2014 年の民話の学校に参加したのが最初でした。それか

ら、いろんな機会に参加させて頂き、皆さん真剣に勉強されているレベルの高さに驚きながらここまでできました。

川島先生の 2011 年の基調講演も記録を読ませて頂き、海の近くで語るんだったら引き受けてもいいか、東北では亡くなった方に語りかけるのが供養になるという言葉がとても胸に残っていますし、今日のトメヨさんのお話や村上さんの紙芝居も初めて聞かせていただいて、ストーリーのひとつひとつがすごいなと心動かされました。また、加藤さんが紹介してくださいった、小野さんと車で移動していたら、別の車が反対車線から向かってきて、なぜか大きな力が動かしたかのように避けることができたという、紙一重の運とか縁なんでしょうけども、語り継ぐとか、人間の努力でできることと、でも最後はそんな大きな力で動かされていたんだな、人間はとあらためて思いました。川島先生がおっしゃった、そういう時に力が蓄えられていくという、そういうのが本当の学びだし、大学の教室で学べないことだと。皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。今後ともよろしくお願いします。

・今日は本当に皆さんようお越しくださいました。9 月の仙台がこんなに暑いなんていうのはあんまりないことなので、向こうから来た方は普通かなと思うか分かんないんですが、トメヨさんも体調をちょっと悪くされて、それでもあの元気さで語ってくださいました。私はトメヨさんが民話から力をもらったって言った時、民話を長くやってたのに、力って何？ と思ったんですよ。その後、本当に必死に勉強しました。真剣に向かい合わないと、民話って消えていくもんなんだなと。

小野先生に叱られてばっかし、今も 90 になる小野先生から活を入れてもらわないと、なかなか進めないかなと思いましたが、今日、トメヨさんにお話を聞いてもらってわかるように、本当に語る力っていうものが、人に訴える力っていうのを体験していただけてよかったなと思っています。民話の会は平均年齢がもう 90 の方が 4 人とか、私たちはまだ若い方、ちょうど団先生と同じ歳なんですけれど、皆さんにとっては古い人になってるんだけど、でも昔話って昔の話ですか？っていうことを軸に問いかけています。

そしてその話、おにぎりを数えたわけじゃないのに、偶然わけたらピッタシだったっていうことからなんか不思議な力、大きな力、もしかしたら亡くなった娘さんかもしれない。、そういうものに守られてるんじゃないかって思ったのは、東北に残っている縄文からの先祖を敬う、その人たちが守ってくれてるっていう思想が私たちの遺伝子の中にもあるっていうのを最近しみじみ感じてるのです。昔話として、今は、科学的でないとか、そんな話、嘘だとか、でも実際体験してるっていう人みんないると思うので、それを今日はいただいたなと思って。本当にありがとうございました。私たちもあの皆さんと出会わせていただくことってすごく刺激にもなるし、すごく感心するのは、東日本の応援プロジェクト。、普通はまあ年経ったからもういいかっていう感じで区切りがつくのかなと思ったんですけども、そうじゃなくて、まだ続いて来年もありそうだっていう、そのことってすごく大事だなってすごく思うんです。いわゆる被災した人たちは早く忘れたいという思いと、忘れて欲しくない、みんなに知ってほしいって思い、両方あると思うんですね。

でも、あの周りの方はやっぱり常にこう目を向けて、やっぱり自分事として明日自分のところに何かが降りかかってくるかもしれないという思いと、それからあの被災した人たちのその大変さみたいなのをね、両方をやっぱり感じていただけたらいいのかななんてすごく思います。このプロジェクトが本当にいろんな力になってるっていう風に思いますので、本当に暑い中で大変だったと思いますけども。ありがとうございました。



終了後、小高に移動、双葉屋旅館にチェックイン後、夕食を取りながら振り返りの会を持ちました。

9月2日(月)沿岸部フィールドワーク

おれたちの伝承館

朝一番、おれたちの伝承館へ行き、中筋純館長の説明も受けながら見学した。入り口を入ると、「原子力 明るい未来の エネルギー」の看板を外す時に最後まで残ったという「未来」の文字とともに、お腹を空かせた牛が柱を食べてまで生き残ろうとしたが死んでしまった悲しい物語のインスタレーションがあり、中筋さんは、「もの言わぬものたちの被害に目を向けてほしい」と言った。

それから写真家である中筋さんが撮影した巻き物になった町の写真を拡げて見せてもらった。写真は、建物を壊す前の街の風景を見ながら、ここにはかつて、人がたくさん暮らしていて、平穏な営みがあったことを映し出していた。

庭には矢印のオブジェが造られており、その矢印の先が、福島第一原子力発電所を指している。絶滅危惧種だったミズアオイが土地を掘り起こして出てきたそうだ。



双葉屋旅館・商工会女性部

双葉屋旅館に戻り、大広間で商工会女性部の皆さんから、小高での被災についてお話を伺った。小高は原発事故後避難区域に指定され、皆あちこちへ避難した。父が透析を受けられる病院を探さなければならず、その父も「小高へ帰る」と亡くなるまで毎日おっしゃっていたそうだ。

震災から5年後にやっと戻ってきて、その家の片付けに苦労された話や、商売を始めても以前の客が来ない、自分が高齢で後継者がいないという問題が重くのしかかり、復興を躊躇してしまう現実があった。ねずみが大量発生したことなど、ユーモアも交えて話されていたものの、その苦労は想像を絶すると思う。地元愛と切なさを感じるお話だった。

「小高の放射線量の数値は低かったけれど、近いし何かあるかわからないから避難した選択は正解だった」とおっしゃっていた。放射能測定センターをボランティアでやっていて、毎年、空間線量を測っている。除染して、もう大丈夫だよと言われているが、除染したときは確かに低いけど、できないところは何倍も高いのが現実だから、そこをちゃんと見せて知らせていくのは私達の義務かなと思っているとのこと。南相馬市では、原発からの距離や避難指示区域の線引きによって、一番南にある小高区の賠償額が他区より多くなり、それが市民の間で大きな賠償格差や地域の分断という深刻な問題につながった。うえ、2022年の追加賠償ではさらに格差ができたということだった。避難解除後、小高区では若手の起業家や移住者がお店や事業を立ち上げている。若い人たちをバックアップしたいと母親のような気持ちでやってい

る。土日はひまわりカフェをやっているそうだ。おれたちの伝承館の土地と建物も、商工会の方の紹介で開館することができたそうだ。



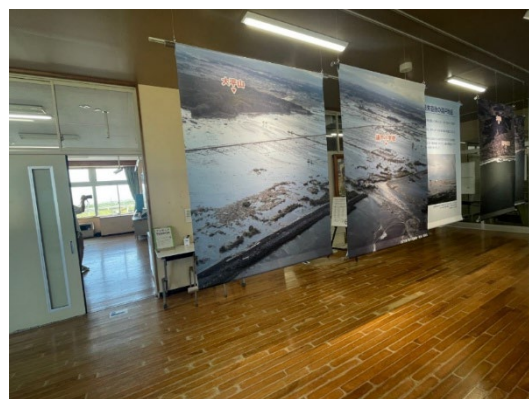
震災遺構浪江町立請戸小学校

双葉屋でおいしいカレーを頂いた後、午後からは、中筋さんの案内で、イノベーションコースト、請戸小学校、大平山霊園、原子力災害伝承館、双葉町、大熊町をフィールドワークした。

浪江にあるイノベーションコーストによる工業地帯は、人が住まなくなった土地に最先端のテクノロジーが入っている。このあたりには小高の山を削った盛り土が利用されているそうだ。さらに車で走っていくと、大規模なソーラーパネルの田んぼが広がり、震災遺構の請戸小学校を見学した。請戸小学校



の1階部分は津波の被害によって建造物の多くが大破し、廃墟と化していた。厨房の大きな調理器具が津波によって押し流されて壁に押し付けられたまま残っていたり、体育館の床が陥没していた。



東日本大震災原子力災害伝承館

東日本大震災原子力災害伝承館へ行った。伝承館では、高村さんの語り部講話を聞いた。高村さんはオープンから4年間ずっと語り部をやっておられる。実は、2019年に伝承館が開館して1週間後に訪れた時、お話を聴かせてもらったのも高村さんだった。

高村さんは南相馬市の出身で、地図を示しながら線引き問題を説明してくれた。避難指示があった20キロのライン。30キロ圏内は、当時、屋内退避後緊急避難準備区域だった。鹿島は30キロ圏外で、同じ街なのに、

このラインによって命の線引きがされた。一番大きな問題はお金で、賠償金がまったく違う。いろんな措置法で置かれた医療費が無料、あるいは高速道路も30キロ圏内の人間は来年の2月までそういった処置があるが、30キロ圏外の方たちには最初からない。賠償金もない。このラインで放射性物質が止まったわけではないにもかかわらず、線が引かれたことにより、地域の分断が今も心の中に残っている。もう口に出す人はほとんどいないが、昨年5次追補という賠償金があった。広く宮城や茨城の方まで5万円から8万円、そして20キロ圏内の方は1人280万というふうに金額が違った。どうしても住民同士で弱者にストレスが向かってしまうが、不満は国や東電に言えばいい。

高村さんは老人ホームで働いていたが、日本沈没するのではないかと思うほどの揺れを経験して子どもたちといたんは避難したが、東電で働いていたこともあり、安全神話どっぷりだったため家に帰った。翌日、十キロ圏内避難指示が出た。それから1号機爆発、20キロ圏内避難指示が出たが、避難と言っても自分のところが何キロなのか、どこへ行ったらいいのかわからなかった。親戚たちから逃げろと連絡が入り、逃げることにしたが、どこに逃げたらいいのか。とりあえず走れる方向は西しかなく、飯館村、川俣町、どこに行ってもだめで、道の駅で車中泊をした。子どもが寒い、お腹がすいたと言うので、いったん自宅に戻ると、携帯にたくさんのメッセージが入っていて、東電の家族が逃げた、老人ホームがたいへんとのことで、とりあえず会津に向かい、自分は職場に戻る決意をした。

子どもたちの父親が会津に着いたのは夜

中だった。そこで子どもたちと別れ、自分は南相馬に戻った。原町火力発電所が爆発したという放送が流れ、目の前には200人近い高齢者たちがいた。そして、全国放送が3号機の爆発を伝えた。時間を知らないまま普通に仕事をしていたが、大きな音を聞いた。職員が避難を始めたので、1人1人のケアができず、放置されたおばあさんは一気に痴ほうが進み、目から輝きがなくなっていった。やめることはできないと思ったが、上司に「正職員じゃないあなたに、これ以上責任は負わせられない、お帰りください」と言われ、正直ほっとした。放射能汚染が始まっていたが、自分たちは何も知らなかった。

同じシングルマザーの友人が連絡をくれた。避難すると思ったらつらいから、福島の温泉予約したから一緒に行こうと言ってくれ、地震から4日目、初めて笑った。生きていけると思った。原発が爆発をしても誰も助けに来ない。関東に電気を送り、原発が地域にあることが誉れと言われ、クリーンなエネルギー、未来のエネルギーと言われ続けた、私達が一体何をしたというのか。

ゴールデンウィークが過ぎて、東北新幹線に動き出し、やっと4歳の息子を迎えに行くと、息子は壊れていた。埼玉の保育園で、福島から来た子と遊ぶな、福島から来た子だと言われ続けたそうだ。泣くだけで喋れなくなっていた。自分を責め、津波で死んだ方が良かったと思うぐらいにつらかった。4歳の子供にそこで遊んじゃだめ、お花に触っちゃ駄目、駄目ばかりでおかしくなると思った。それからまた山形県に避難。いつまで避難を続けるのか。福島に帰るべきかと悩む。専門家や科学者、様々な人に聞いても、誰からも答えが得られない。

だから、翌年、ベラルーシ、ウクライナまで行った。同じ体験をしたお母さんたちに聞きたかった。どうやって子どもを育てたのか、何を食べてきたのか。お母さんたちは親切に教えてくれた。様々なことを学び、南相馬に戻ることを決めた。高村さんの体はベラルーシで850ベクレルという数字が出たが、低いのか高いのかもよくわからない。放射線は当たり前にある。そして後から様々なことを知らされる。

あのとき原発が爆発をしなければ、津波の犠牲者の方は助かったかもしれない。そういったことを後から後から知らされる。あのとき知っていたらと、ちょっと後悔し、そして、恨んでいる。そのようなことを語り、ずっと13年話し続けている。残念なことに語り部は増えない。逆に高齢の方はだんだん喋れなくなっていく、今福島県は高校生の語り部を作るといって動いている。でもみんな心に傷を持っている。

私は毎度、皆様をお願いをしている。私のようなものの話を聞いてくださり、そして伝承館の資料を読んで、そしてこの地域を見て、終わってますか、復興してますか。お戻りになってから、大事な方、お友達ご家族、周りの方にお話をしてくださいと。ご清聴ありがとうございました。



周辺のフィールドワーク

伝承館を後にし、廃校になった双葉高校、大熊町長者原中間貯蔵施設を遠望（線量が高いため）、大熊町 JR 大野駅周辺、大熊町新市街などを見て回った。

かつて大熊町の商店街だったところを訪れた。そこは現在、雑草が生い茂る空き地に電柱だけがポツンと残り、遠くに大型スーパー建設中であるのが見渡せた。中筋さんはそこに 2014 年にここで撮ったパノラマ写真の巻物を拡げて置いた。原発事故による立ち入り制限区域となって3年後の写真であるから、人は誰もいない。しかし、以前はここに人々の暮らしがあったことが想像できる。この写真がなければ、そんなことはまったくなかったことにされてしまうだろう。失われたものは、土地や建物だけではなく、ここで営んできた生活であり、関係であり、歴史である。復興とは歴史の塗り替えなのか。記録することの意義を大いに感じる機会になった。

この地域では自転車ロードレースなど復興イベントが開催される予定である。しかし、この道は線量が低いものの、今でも地元の人には汚染の危険性が高い山沿いは近づかない。私たちも、道を歩く際には茂みの中には入らない、道路のわきにたまっている砂には触れないようにと指導された。実際、中筋さんが道端の土に放射線測定器を当てると、 $0.23\mu\text{Sv/h}$ だった。

この日は新しくできた富岡ホテルに宿泊し、夜はみなで振り返りをした。



9月3日(火)沿岸部フィールドワーク

富岡町メガソーラー発電所

最終日は再び視察ツアーである。道中にはオープン寸前に震災が起き、オープンすることのなかったケーズデンキの大きな建物があつた。中に家電の箱がたくさんあり、震災後それを狙った泥棒が頻発したという。

夜の森の桜並木、夜の森駅周辺を見た後、富岡町のメガソーラー発電所 sakura を訪問し、視察担当の猪狩さんからお話を伺った。人が住まなくなり、農業が出来なくなった土地を地主から借り上げ、メガソーラーが建てられた。今はソーラーや風車ができているが、それぞれが環境問題を引き起こしている。20年後は農地にできると言うが、20年後にこの町はどうなっているのだろう。



ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館

その後、檜葉町の宝鏡寺にある「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」を訪ねた。館長である安斎育郎にお話を聞く予定だったが、台風の影響を受け来れなくなったため、急遽、事務局長の丹治さんが迎えてくれた。伝言館は、「核」という視点から原発や原爆を捉え、過去を悔い、平和な未来へ向けて伝言していこうという施設である。

丹治さんは東京杉並区出身で、宮城の大学を出て県庁に2年勤めた後、東京に戻り映画会社に勤めていた。そこで知り合った音響の人がたまたま福島の人で、24年前になるが、いわきに嫁いできた。いわき市は原発から30~40キロ、平成の大合併の前は日本一大きな行政府で、JRの駅が13もあった。12年間幸せに暮らしていたが、原発事故が起こった。

いわき市のど真ん中、平という地域に住んでいて、2時46分、車を運転していた。ドーンと突き上げる揺れで自分の車の天井に頭を打ち付けて、一瞬気を失う。意識が戻ったときには無意識に車のサイドブレーキを引いていたようで、車が側溝に軽くぶつかった状態で止まっていた。目の前にある日産の工場では、車と車がガチャガチャとぶつかり合っ、お互いに乗り上げるような状態だった。もう地獄絵図。大学4年のときに宮城県沖地震を経験していて、2度目の巨大地震だった。

原発から20キロまでに避難指示が出、30キロまでは屋内退避ということで、自主的避難区域ということになった。避難しないでいい。丹治さんの家は、原発事故から34キロのところにあつたので、自主的避難区域ということになったが、被害はないかと言え

ば、そんなことはない。今、いわきに戻って来たが、我が家の庭の土地は今 8 万ベクレルある。これは中間貯蔵施設と言われる場所の中に住んでいるのと同じ環境。ただ、空間線量で言うと、今朝は 0.06 ぐらいで、皆さんの住んでいるところをさして変わりがないが、土を触ろうものなら 8 万ベクレルということになる。

除染と言っても、表面の土を全部剥いで庭の隅っこに穴を掘って埋めて、レンガを乗せて土に触れないようにという努力はしている。環境省に電話して、こんなひどい汚染状態なのに、何もしてくれないのかと言っても、もう 13 年もたって、空間線量 0.06 だから心配ないですよと言われる。福島県は 3.11 以降ずっと緊急事態原始原発事故緊急事態宣言が発せられたまま。

1945 年 8 月 6 日、広島に原子爆弾が落とされました。この日、福岡県八女市の山本達雄さんという軍人が広島にいたおじさんを心配して家に行ってみたら、すべて燃えて何もなくなっていた。防空壕に行ったらおじさんらしき骨はあった。その脇でチョロチョロ燃えていた火を携帯カイロに採火して、悔しい、いつかアメリカを何としてもやっつけてやるんだということで自分の家に持ち帰って仏壇に供したそう。

平和な時代が来て、やられたらやり返すというようなことでは、戦争は終わらない。もう二度と広島、長崎のようなことを起こさないために、福岡県八女市の大きな塔の上で火が燃えている。

この火のことは初めて聞いたが、当初は「恨みの火」「復讐の火」として火鉢やこたつにひそかに保存していましたが「報復では永久に平和は来ない」と考えを改め、23 年後

の 1968 年星野村役場に提供し、以来同村は「平和の火」として保存されているそう。

その火は東京の東照宮にも分けられて燃やしていたが、年間 20 万ぐらいかかるので管理しきれないから福岡県八女市に返すということになったが、ご住職早川篤雄が受け継ぎ、2021 年 3 月 11 日、原発事故から 10 年後の 3.11 にここに来た。早川住職は私財を投げうって、立命館大学の安斎育郎先生と協力して伝言館を完成させた。2 人は原発反対運動から、40 年来の友人で、安斎先生が早川さんに送った手紙の文面がこれで、早川さんがこの文面を残したいと悔恨の碑を建てた。こんな碑は世界中探してもたぶんここにしかない。文案は安斎育郎さん、石はインドから持ってきたもの。ここは 600 年続くお寺の敷地なので、浄土宗の宗教法人に未来を託して残していく。広島・長崎・ヒキニ・福島という日本が被った核の被害全部を使って平和の大切さを訴えている、こういう資料館は他にないと思う。

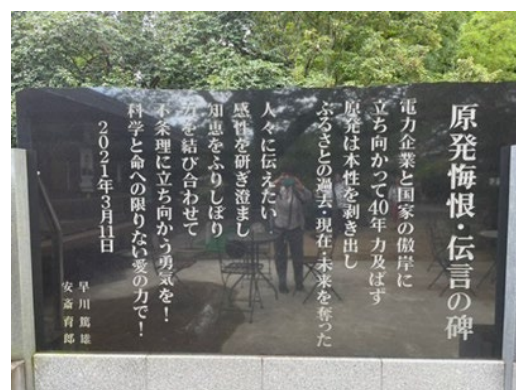
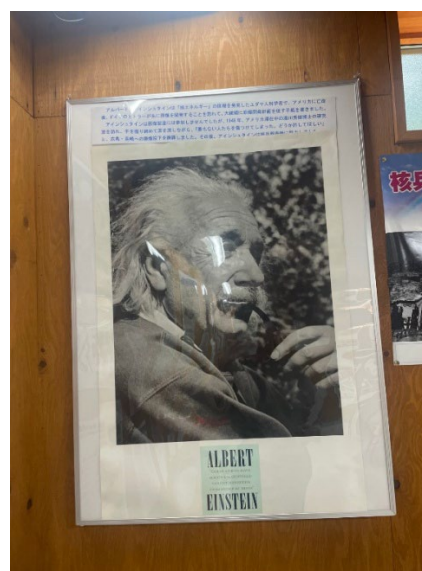
原発は燃料プルトニウム製造工場だから、エネルギー政策の議論だけでは原発はなくなる。核兵器をなくしていく。核兵器の製造工場が原発ということの視点に立たないと、原発はなくなっていく。差し止めの樋口裁判長がよく言うが、停電が起きただけで日本がオジャンになる、これが原発だ。車は地上を走っていてエンジンが止まったらそこで終わりだが、飛行機が一番高いところでエンジンが止まったらここから恐怖が始まる。まさに原発はそういうこと。エンジンが止まって、空の一番高いところで何万人何十万人と人を乗せた飛行機がエンジンが止まって一目散に落ちこちてくる。これが原発というものの事故のイメージだから、絶対に原子力

発電所なんていうものは事故があってはいけない。だけど、全部を今すぐ廃炉にできるか。今、第1原発では4000人の人が働いている。交代要員が必要だから倍ぐらいの人がいる。日本中の54基の原発を全部いっぺんになくして、全部同じようにやるとしたら、日本中の成年男女含めて廃炉作業員にならなければ終わらない。

ドイツは福島原発事故後に廃炉を決めた。原発の建物に太陽光パネルを貼り付けたりしている。要するに全部壊すのではなく、安全な状態にして、送電線は来てるので、再生エネルギーを作っている。チェルノブイリにも3回行ったが、今、ロシアとウクライナ戦争をしている。ロシアがザポリージャ原発を攻撃した。これ以上攻撃を受けると大変なことになる。原発っていうのはどこから考えても大変危険な建物だ。

もう一言だけ、福島被災地は東京23区半分の面積がまだ帰還困難区域になっている。東京で23区の半分か戻れなかったらどうでしょう。福島だったらいいのか。汚染水の問題も出てきた。海に何十万と何百万トンという水がどんどん捨てられたら、黒潮に乗って、日本中どころか世界中を回る。

その他、説得力あるたくさん話を聞かせてもらった。院生たちも考えるところがたくさんあっただろう。



原発災害考証館

最後の訪問先は、いわき市古滝屋にある原発災害原子力災害考証館。津波や地震と異なり、原子力災害では今もなお苦しんでいる方がいたり、知人が原発関連の仕事をしていたりと複雑な関係性の中にあるため、語りたがる人がいない。特に実名で語ってくれる人は皆無であること、原子力災害のみにフォーカスして伝えている施設はないので、原子力について、公、民、住民の3つの立場の人で考え、そこで起こっていることを知り、対話したいという思いでこの施設を造られたそうだ。

ここの展示には、津波被害に遭われた木村紀夫さんのインスタレーションがある。木村さん一家は双葉町のフレコンバッグ群のさらに奥の沿岸部で津波被害を受け、妻、父が遺体で見つかったが、7歳の次女汐凧ちゃんが行方不明のままだった。地元の消防団によって必死の搜索が行われたが、原発の爆発前に搜索が打ち切られ、以後5年7ヶ月もの間行方不明となっていた。父である木村紀夫さんは、公的な搜索が打ち切られたあとも自らの足で家族を探し続け、5年以上経ったのちによろやくわずかな遺品を見つけ出され、考証館に展示されているのは、そんな汐凧ちゃんの持ち物だ。どんなにか無念であることだろう。

館長の里見さんによれば、原発事故が起こり、人がいなくなった福島沿岸部には豊かな自然がもどってきたそうだ。絶滅したとされる植物も芽吹いた。今、そこにコンクリートの大堤防の建設が始まっている。人は住まないのに、豊かになった自然を破壊してまでする必要のある工事なのか。

今年も複雑な思いを抱え、帰路に着いた。



つづく